

激しい攻撃を受けたハマス運営の各省庁



昨年十二月二十七日 攻撃を開始した。ハマスにイスラエル軍がガザ

スのロケット攻撃への

悲劇の街・ガザ（上）

報復として。

日々、死者は増え、

あまりの過剰攻撃に国際世論の非難が集中して一月十八日、やっと攻撃は中止された。

一九九五年からパレスチナにかかわり続けている娘のリカから最新のガザの写真が届いた。今回と次回は予定を変更してその写真を紹介させていただく。

イスラエル占領下にあるパレスチナ自治区のガザは幅十キロ、長さ四十キロの狭い地に百五十万人が住んでいる。一九六七年の第三次中東戦争以来、パレスチナ全域からアラブ人が難民となってガザに集中し、国連に難民として登録されている数は百万人を超える。



家々は跡形もなくなった

現地の住民はガザを「天井なき監獄」と呼ぶ。すべてをイスラエル軍に包囲され、自由に出入りすることはできない。

この写真に目をやるだけでなく、一枚ずつじーっと見て目を閉じ、その場を想像し、そこに自分を置いてみていただきたい。

二十三日間の攻撃でパレスチナ側の死者は千三百人、負傷者は五千四百人。一方、イス

ラエル側の死者は十三人、負傷者八十人。

私もかつて訪れたガザの街の多くががれきと化し、そこから離れることもできない、悲劇の街となっている。どちらが正しいという以前にこの悲惨な状況に胸が痛むが、悲劇は今もなお続いている。停戦後もガザ封鎖は続いており、搬入が許されるのは最低限の医薬品と食料品。復興に必要なセメントなどは

搬入が認められない。ユダヤ人はかつて弱者だった。二千年前、ユダヤ教の神殿は破壊され、エルサレムのユダヤ人は世界各地に散らした。

第二次世界大戦ではナチスドイツによってユダヤ人六百万人が殺された歴史を持つ。しかし今、弱者は強者となり、弱者を迫害しているように見える。ガザを訪れた時、家のカギを見せられた。一九四八年、国連によ

ってイスラエルの建国が認められ、反対するアラブ諸国との間で第一次中東戦争が起きた。ユダヤ人の領土となった土地に住んでいたパレスチナ人たちは家にカギをかけ、すぐ帰れると思ってガザに逃げた。

あれからもう六十年が過ぎたのに、彼らは今も難民としてガザに住み、そのガザも悲劇の街になっている。（元山口放送取締役ラジオ局長）



がれきの中でぼう然とする少女